

series Salamander in the circle

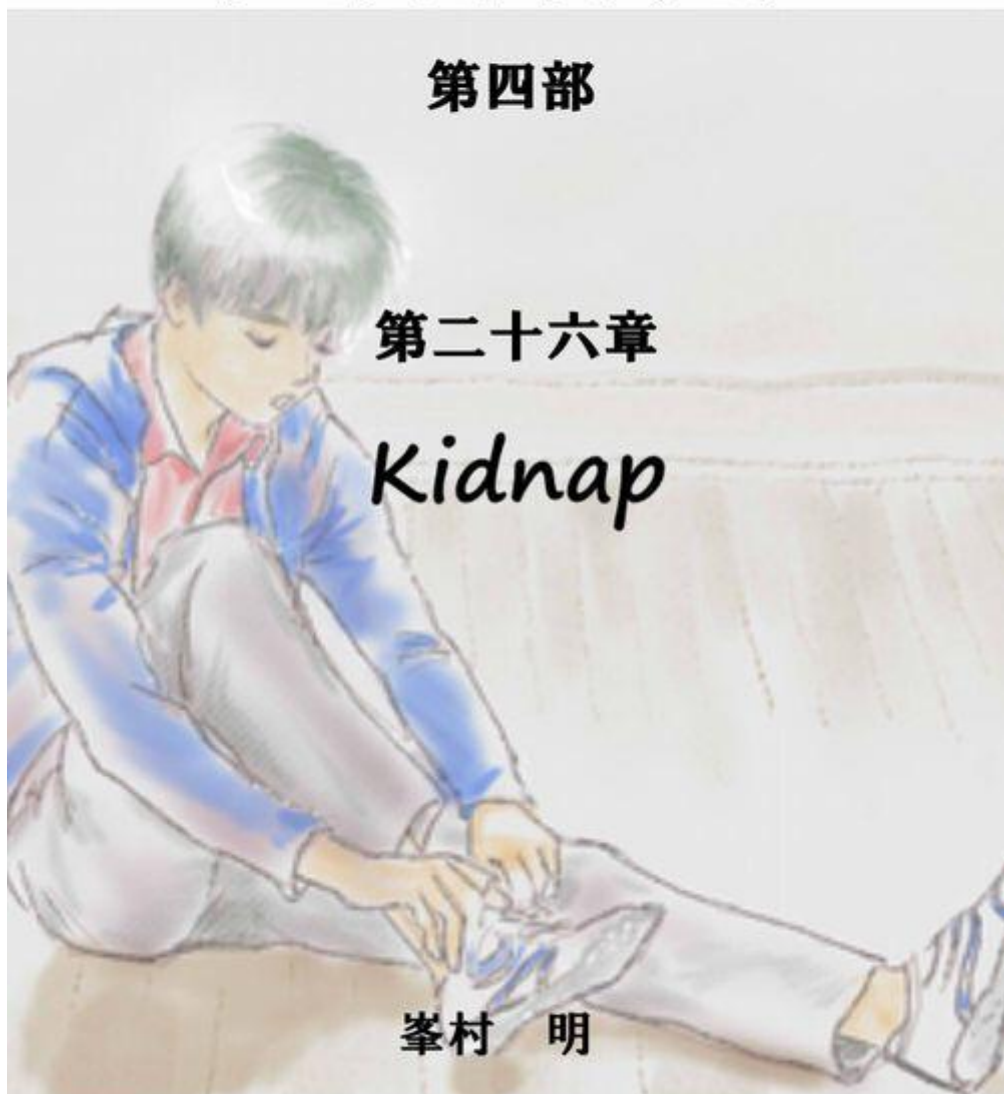
リ・コンストラクション

第四部

第二十六章

Kidnap

峯村 明



リ・コンストラクション

登場人物

26・Kidnap

257.

258.

259.

260.

261.

262.

263.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H & L 財団・財務部門勤務
〃 ひろ	健の妻
サーディク	エドミールのステージネーム
ウィンディ・サトウ	H & L 財団・法律部門で働く職員
A, ドストエフスカヤ	H & L 財団・法務部門責任者
竜門渕 優美子	メルノ

26・Kidnap

257.

アレクサンドラ・ドストエフスカヤは呆然と立ちすくんでいた。引き出しを半開きにして入れておいた"TS"USBメモリが無断でコピーされた形跡がある。

「まさか！ こんな見え透いた手に、ほんとに引っかかるなんて！」

バラム & バランケの証言によると犯人は他でもない、ウィンディ・サトウである。

「ケンの言った通りだわ」驚くやら呆れるやら、衝撃の動悸がなかなか納まらない。中身は彼女の自作の詩である。趣味で長年書き貯めたものだ。誰にも見せたことがない。Top SecretといえばTop Secretに違いない。なにか、害のないものを、とラウレンス氏に言われて自分のパソコンからUSBに移したのだ。

「害はないかもしれないけど、ちょっと恥ずかしいわ、全部恋の詩なもの」
呟いてから、盗まれた極秘データに向かって投げキスをするのだった。

＊

その日。H&L財団に一本の電話がかかって来た。代表者を出せという。
《とても大事な用なのだよ。代表者が不在なら代わりの人間を出しておくれ。大至急》

代表電話を受けた部署はいっしゅんざわめいた。ラウレンス代表は南米へ出張中だ。代わりの人間といたら誰？ そこへ通りかかったのがアントニオ・パウジーニだった。そうだ、パウジーニの言う『総裁』に代わってもらおう。

こうして電話は総裁・桧山健のところへ回ってきた。

＊

電話をとった瞬間、健は直感した。この波動。忘れもしない、やつだ！
しかし相手は電話に出た者を認識している気配はなく、たいそう丁寧に云ってきた。

《おたくの財団の秘密が今、ワタシの手元にあるのだよ。パソコンのキーをちょっと操作すれば、インターネットに流れるという寸法だ。どうだね、困らないかね？》

「財団の秘密だって！？ いったい何だ！？ 組織表か財務諸表か、それとも！ まさか——sbornik stikhov！？」

詩集を意味するロシア語"sbornik stikhov"はひじょうに発音が難しい。健はアレクサンドラからなんどもダメ出しされた。

《そうそう、その最後のだよ》

「それは困る。やめてくれ」

《だよねえ。やめてあげてもいいんだけどね、代わりのモノが欲しいな》

「代わりのモノとは？」

《おたくのところにサーディクという先生がいるでしょ、その人と財団の秘密のデータと、交換しよう》

「インターネットに流せるということはデジタル・データだな？ 簡単にコピーできるはずだ。コピーがないという証拠は？」

《証拠はないがコピーはないよ。ワタシを信用できないのかな？》

「名乗らない者をどうやって信用するのだ。名を名乗れ」

《ふふふん、ワタシの名？ ベネトナシュ、とでもしておこう》

健はすばやくメモを書いてパウジーニに渡した。（サーディクとボディーガードたちを呼んでくれ。すぐに！）

「……かわった名だな。この世に二人としないだろう」

《ワタシだけ名乗らせるつもり？ あなたも名乗りなさいよ、代理人さん》

「……ヒヤマケン」

《チャイニーズ？》

「ちがう。日本人だ」

《あ、そう。まあどうでもいいじゃない、そんなこと》

そんな会話をしているところへ、呼び出した三人がかけつけてきた。健は会話しながらとったメモを三人に見せる。サーディク本人はともかく、ボディーガードの二人はこういった場合の対処法は心得ている。こういう時のために彼らは存在し、マスターのために体を張るのが彼らの使命なのだ。

258.

「どうして私なんだ??」

「まったくだ。それに、データを持ち出したのはウィンディなのに、どうしてベネトナシュが出てくるんだ??」

健はクローゼットから上着を取り出しながら言う。

「考えても始まらない。とにかく、行ってみよう。確かめるんだ。『サーディク』をひとり出してくれ」

間髪入れず、XとYが同時に一歩前に踏み出し、互いの肩がぶつかった。

「私だ」「私が行く」「きみは残れ」「きみこそ残れ」

「よく仕込んだな」「まあな」

「じゃんけんで決めよう」「いいとも」

「……………」 「……………」

ボディーガードたちは任務の危険度に査定が比例するのであった。

＊

緑色のコンタクトレンズと黒髪縦ロールのウィッグをつけたXはもはやマスターと見分けがつかない。

健と影武者Xが指定の待ち合わせ場所に向かう頃。送り出した側としてはやはり落ち着かない。己の身代わりを立てた実直なサーディク先生としては、なおさらである。

(先生、今日はなんだかいつもと違くない？)(そわそわしてる？)(あ、やっぱりそう思う？)(思う)(ぼくも)(わたしも)(どしたんだろ)(さあ)

夏季ワークショップに参加中の、感受性豊かな少年少女も心配する有様であった。心配する彼らを休憩させ、タブレットで進捗状況を確認しているときのことである。

つ、とYが近寄ってきた。

(マスター)

(——ん？)

(マスターに、お客様だそうです)

(私に？)、と思わずボディーガードの顔を見る。(誰？)

Yはイヤホンに耳を傾ける。(女性の方で……)

サーディクの胸中にイヤな予感が暗雲となって湧き上がり、思わず身構える。

(リュウモンブチ、と名乗っておられるとか)

(リュウモンブチ！？)

サーディク先生が絶句して逡巡しているところへ、受付係がそのお客をワークショップ中のスタジオへ案内してきた。あとで聞いたところによると、たまたまエントランスを通りかかったドストエフスカヤが案内するよう進言したのだという。「なんとなくピンと来たのよ」とドストエフスカヤ先生は言った。「このひとはメッサナの人間だ、って。それもあたくしの関係者ではなく、芸術関連だ、ってね」

＊

スタジオといっても、そこは小劇場のような空間。百名を収容できる観客席があり、舞台最前列の緞帳の背後に幾枚も幕が在ってかなりの奥行きがある。照明も音響も防音も完備されていて、演技者も舞台技術者もここで様々な実習ができるようになっている。ひとつの建物のなかにこんな設備が拮がっていようとは思わなかった彼女は、中に通されて面喰い、立ちすくんだ。

すると、背の高い男性が近づいてきて、「どうぞ、こちらへ」と低く言った。
「あなたは……あのときの……」

男性はかるく頭を下げ、彼女をいざなう。あれこれ考えるいとまもなく、サーディク先生はディレクターズチェアから立ち上がってチェアの脚に蹴つまづいた。

いきなりといえばいきなりな再会、いきなりな対面だった。言葉が何も出て来ない。それは彼女も同じだったらしい。

「あ、ああああの、間宮宮司さんからこちらを訪ねてみるよういわれまして。いきなり来てしまっておめんなさい。お仕事中ですよ？ あ、あたし、で、出直してきます——」
「い、いいいいいや！ 休憩中ですから、ぜんぜん！ えー、その、ちょっと、びっくりしてしまっ——」

受講中の少年少女が約十人、その保護者が数人、場内にいて、彼らの興味津々の目線を遮るよう、ふたりに背を向けて壁をつくりながら、マスターでも言葉がつかえることがあるのかとYは思った。

その時だった。いきなり——どん！——衝撃があった。衝撃としか言いようがなかった。そして警報音が響いた。

259.

その場にいた者全員が硬直し、あるいは飛び上がり、悲鳴が上がった。

ユミコの手は反射的に宙を泳ぎ、サーディク先生は反射的にその手をとって支えた。「大丈夫！」と反射的に口走るが、何がおこったのかさっぱりわからない。

大音量の警報音はFと#Fの和音という気持ち悪さ。いやがうえにも神経を逆撫でされる。絶対にあとで文句をいってやろうとサーディク先生は心に誓う。気持ちが悪すぎてなにも考えられないじゃないか！！ だいたい、センスが無さすぎる！！

永遠に鳴り続けるかと思われた警報音が突然、ふっ、と止んだ。静かになったと思ったら、照明が落ちた。非常灯に切り替わる。ざわめきが納まらない。なにがあったんだ？ 警報が鳴る前になにか衝撃があった。あれはいったいなんだ？

そんな意味の会話があちこちから聞こえる。受講生やその保護者の世話はH&Lのスタッフの仕事だからそれは任せるとして。

館内有線を使ってどこかと話していたYが、(外を見えます)と言い残していったんスタジオを出て行った。が、すぐに戻ってきた。

(防火シャッターが降りていて、このエリアから出られません。保安部は調査中だというだけです)

(非常口から外へ出られないのか？)

(非常口へは財団のスタッフが通せんぼしてるんです)

(え？)

(いったいどういうことでしょうか？ 火災なら避難させなければならないのに。人の出入りを止める、ということでしょうか、一般人がいるのはこのエリアからですから、一般人を巻き込みたくないとか……憶測ですみません)

(………)

(それから……先程警報が鳴る直前に、Xがなにか言ってきたんですが、こっちの音が大きくて聞き取れませんでした……今は繋がりません)

(何か起こったな。予想外の何かだ……)

(御意)

そこへ、館内放送が。館内警報システムが誤作動した。防火シャッターが降り、停電しているが、現在復旧作業中なので、その場を動かず、しばらくお待ちいただきたい、というのだった。

その放送が終わったところで、サーディク先生はようやくユミコの手を握りっぱなしだったことに気がついた。

「こ、こここれは失礼！」

あわてて手を離したが、ユミコは「いえ」と素気ない。というより、何かに氣を取られているようだ。

あらぬ方角に目をやり、眉の間に皺をよせ、つぶやいた。「——イリチヤ？」

サーディク先生は頭を殴られた思いだ。「ユミコさん、なぜあなたがその名を！？」

ユミコは物思いから覚めるようにサーディクをふり仰いだ。「え？」

＊

非常灯の白々した光が辺りを照らしている。劇的な空間を照らす、ひどく現実的な光。現実的な言葉のざわめき。H&Lのスタッフが「電源が復旧するまで落ち着いて行動してしてください」とアナウンスしているが、彼らにもどれくらいの時間がかかるのかわからない。質問されても答えられないでいる。

サーディクはリーダー格の少年の姿を見つけて、「フィル！」と呼んだ。フィルはすぐにやって来た。「自習だ。なんでもいい、みんなと相談して。ステージを使って。家族が見学に来てる子もいるだろ、なんなら、その人たちも一緒に」

フィルはうなずきながら聞き、利発そうな顔をぱっと輝かせた。「わかりました！ 全員ステージへあげます！ 先生はどうぞごゆっくり！」

フィルが言ったとおり、ざわめきはステージ上へ移り、やがて、コーラスに替わった。客席は静かになった。ボディガードYはふたりからずっと離れて壁際に退いた。

260.

「最初に、あのおときのお詫びをしなければ……」

言いかけるユミコに、サーディクはふるふると頭を振って応じた。そして、何も気にしていない、貴女こそ体調は大丈夫なのか、と云った。一大決心をして不手際と失態の謝罪に来たのに逆に氣遣われて、ユミコは力が抜ける思いだ。間宮宮司はなにも言わなかったが、クライアントから違約を責められていたとしてもおかしくないのだ。

「そのために、わざわざブリュッセルへ？」少なからぬ驚きを込めてサーディクは問い、ユミコはうなずいた。

「アドレスも存じませんし、どうしたものかと悩み、宮司さんなら、と気づいたんです。宮司さんなら連絡先をご存知のはず。どうしても、お詫びをしなければならなかったと思います。それと……もうひとつ……」、と言葉を切る。

「お目にかかりたかった。バイスロイさま」

彼女の口からイリチャの名を聴いた以上の衝撃。財団において互いの魂の名は滅多に呼ばない。現在の名で呼ぶ。面と向かって彼を「バイスロイさま」と呼ぶのは彼の過去を知っている誰かだ。

「私の魂はメッサナのメルノ。でも体は違います。メルノの体は損なわれ、この体の持ち主がメルノの魂を救ってくれました」

なににどう驚くべきか。

メルノ——そのひとはかの日本で百年も前に死んだと思っていた。
このユミコという女性がメルノの子孫である可能性を疑わないではなかったが、春に会った時はそういう話ができる状況ではなかった。サーディクにしてみれば己の存在が彼女を傷つけることを

怖れ、そのことを告げましたが、かえって不審にして不快な思いをさせたにちがいないという後悔が残った。拒絶されたという実感を持ちつつ、日本を離れたのだったが、ユミコのことを忘れることができなかった。

せめて——あのひとに災いが及んでいなければよいが——どうかあのひとを護ってくださいと、金星神に祈るのが日課にまでなっていた。

よもや彼女の方からはるばる訪ねてくるなんて、そして、メルノを名乗ろうとは。

ユミコは鞆から……ハンドバッグのほかに書類鞆を持っていた……本を取り出す。

「それは……」

「病室に、お忘れになりましたね。地図が挟まっていたので、わたくし、ひとりで行ってきました」

「キリガミネへ！？」

「はい。そこでとても懐かしいひとに。バイスロイさまは、スクナさまをご存知でしょう？」

「知ってる——え！ まさかスクナどのに会われた！？」

「ええ。たくさん、お話をしました。かつてのわたくしの身に起こったことを思い出すよう促されました。この体の元の持ち主、ミツハさまのことも、ミツハさまがお持ちだった記憶も。その中で、遠い昔、メッサナの礎が築かれるよりもさらに遠い時代、イリチヤはこの体から生まれたのだと知ったのです」

「メッサナの礎が築かれるよりも前とは？ ミツハさまとは……ただの人ではなさそうですが……いったいどういう方なのですか」

「人ではありません。精霊、水の精霊です。本当の姿は竜です。わたくしはイリチヤに会ったことがありませんけれど、彼も竜なのでは？」

サーディクは言葉を失う。だいたい、イリチヤの名を知っている者など、ほんの一握り。その出生についてはヒューダーでさえ知らないはずだ。彼は目を閉じて頭を振った。信じられない、というように。

「信じられないことばかりだ。いや、知らなかったことばかりだ。たとえ途方がなくとも、あなたが語る言葉には真実の響きがあると、私の中のバイスロイが言っている」

「わたくしはただ、知っていることをお話しているだけです」

「メルノの人生は……私の想像力を超える。……辛かった、だろう……」

「私のかつての人生は、思いもよらない経験の連続でした。辛かったことも、幸せだったこともあり
ました。メッサナを出なければ決して出会うことのなかった人たちがたくさん……でも、すべて過ぎ
去ったこと。今、こうして、バイスロイさまとお話しているのが、夢を見ているようです」

「その通りだメルノ。また会えるなんて、夢のようだ」

長い沈黙。舞台上で歌ってるのはなぜかハレルヤコーラス。

「ときに……友人夫婦がやはりキリガミネでスクナどのに会ったと言っていた。正直、半信半疑
だったが、本当だったのだな。私にも会えるだろうか」

「ああもちろん！ バイスロイさまに会うことがあったら、きっと会いに来てほしいと、言づてを頼ま
れてましたわ、ごめんなさい、後先になってしまって！ あの、お友達のご夫婦というと……」

「あ。彼らは今生のイリチャの両親……」

「もしや、桧山健、さん？」

261.

H&L本部建物に警報が鳴り響く前の時点まで、話は遡る。

*

指定された場所に到着した健とボディーガードXは、同時に車から降りた。

女が立っている。栗色のくるくるしたロングヘア。濃いブルーのボディコンシャスなドレスにピンヒールの、妖艶な女。健はこの女を知っている。

「きみか。ウィンディ・サトウ」

しかし彼女は健に目もくれない。「どなたでしたっけ？」のひとことで片づけ、「サーディクさま」とターゲットに近づいてくる。

「私はベネトナシュと会うはずだったが？」、とサーディク-X。

「彼は来ません。あたしは代理人です。あたしがお相手を」

「では、データを返してもらいたい」

「これ？」

濃い赤のマニキュアの指先に銅色のメモリー。H&Lの、一応、支給品だ。会社の備品である。女はそれを差し出した。

「はい、返すわ」

サーディク-Xは受け取り、健に渡した。あっさりしたものである。

「これで取引は完了ね。データは返したから、運転手は帰っていいわよ。でも、サーディクさまはダメ。あたしといっしょ」

女はサーディク-Xの腕に手を絡ませてきた。

「……私はどうなるのかな？」サーディク-Xはぞわっと鳥肌が立つのを覚えた。なにか妙だ。この女はなにか――

「ウィンディ・サトウ」と健のかたい声。「彼に手を出さない方がいい、きみの、身のためだ」
「忠告したぞ」

「はやく帰りなさいよ、運転手さん」

しかし次の瞬間。ウィンディとサーディク-Xの間を電撃が走った。まさに、切り裂いた、という感じだった。

けたたましい悲鳴とともにウィンディが吹き飛ばされる。アスファルトに叩きつけられ、ドレスの裾はおなかまでめくれあがり、あられもないといったらない。情け容赦ないな……と、健はウィンディがかわいそうになったくらい、手加減もへったくれもなかった。サーディク-Xの方はまったく無傷だ。

――やはり――やつらは別々に行動してたのか！

さっきまでウィンディが立っていた場所に、ゆらゆらと陽炎のようなモノが揺らめいている。
サーディク-Xはそれを間近に見た。金色の女。長い髪も肌も、瞳も、すべてが金色。発する黄金の光の、途方もないエネルギー

ウィンディといい、この金色の女といい――いつだったかマスターが己の女性運の無さを自虐していたことがあるが、今、心から、うなずけた。金色の女に比べたらウィンディはどうしようもないくらい小物だ。しかしウィンディの背後にはベネトナシュとかいう得体の知れないモノがいる。

ウィンディが叫んでいる。「あんた誰よ！！ サーディクさまはあたしのよ！！ 手を出したら許さないんだから！！」

「いや、ウィンディ、オレはきみに手を出すなと言ったんだ」つい参戦してしまう健である。

金色の女はウィンディを一瞥する。ふつうの神経の持ち主なら、心魂がブラックアウトするだろうという破壊力。だがウィンディはひるまなかった。どんな相手でも負けはしないという自負と、根拠不明の自信が彼女を支えていた。

果敢に立ち上がり、いきなり現れた人外のライバルに人差し指を指しつけた。

262.

「ちょっと待ってなさいよ！ サーディクさまに来てもらうのに、いろいろ手間がかかってんだから！」、と啖呵を切って、健とサーディク-Xに向き直った。

「サーディクさまと落ち合えなかった時のために、手を打ってあるのよ！ 運転手！ あんたんとかのかわいい坊や！ あの子がどうなっても知らないからね！！」

いっしゅん、ウィンディの言葉の意味がつかめなかった。しかし本来軍人のXの理解力と行動は速かった。スーツの襟裏に仕込んだマイクに向かって怒鳴る。相手は同僚Y。「警戒しろ！！ 総裁の息子が——！！」

ほぼ時を同じくして、健の携帯に着信、自動的にイヤホンで受けるように設定してあった。ひろの声が叫んでいる。「真がいらない！ 健、真がいらないのよ！！」

なんということか。ベネトナシュとウィンディは、サーディクを確実におびき出すために真を人質にしたのだ。

*

ばかな！！

ふざけるな！！

いい加減にしろ！！

なにか叫んだような気がするが、なにも叫ばなかったかもしれない。ただ、経験したことのない激情で、頭が破裂しそうだった。

なぜ真なんだ！！ なぜ！？

しかし異様に冷静な健が存在する。いや、健ではなくヒューダーが表に現れたのかもしれない。ぐいとウィンディに詰め寄り、柔らかい二の腕を力まかせに掴む。

「真はどこにいる」

自分でぞっとするような低い声だった。"昔の男"と小ばかにしていたウィンディもさすがに鼻白んだ。

「——知らないわよ」

「真はどこにいる」

「し、知らないったら！ あたしに化けたベネトナシュがお城から連れ出したのよ、その後は知らない！ ほんとうよ！！」

「総裁！ 本部でなにか非常事態が！ 戻りましょう！」

「ちょ、ちょっと待ってサーディクさま——」

しかしサーディク-Xはすでに車に走っていた。健が運転してきてエンジン回しっぱなしだったボルシェの運転席にさっさと乗り込み、ぎゃうん、と派手にタイヤをきまして方向転換する。健はウィンディを突き放し、金色の女に向かって言った。

「シパド、だな？ きみのことだから気づいているだろうが、彼は本物ではない。本物はウィンディが言ったように、おびき出されそうになり、身代わりを立てたのだ。もし、きみが、本当に彼を愛しているのなら、手を出さないでもらいたい」

それだけ言って車に向かおうとし、足をとめ、先刻取り戻したUSBをウィンディに押しつけた。

「シパド。ひとつ、たのんでいいか。すぐに警察がくる。それまでウィンディを足止めしておいてくれ」

《待て》

「なにか？」

《さっき、ベネトナシュ、と言ったな》

「いかにも。今回のことはベネトナシュが主犯だ」

《……………》

ひろは半狂乱だった。真がない！ ほんの一瞬、目を離した。それも自宅から廊下へ出て、玄関ドアを閉めた、それだけだったのに！！ 振り返ったらもう姿が見えなかった。たった今までそこにいたのに！！

「真！！ 真、どこ！？ 返事して！！」

大声で呼ばわっていると、聞きつけた人が集まって来た。

「うちの子、見かけませんでしたか！！」

みんな首を横に振る。健は館内にいるのだろうか、とにかく知らせなくっちゃ、と震える手で電話する。「真がない！ 健、真がないのよ！！」

どこかの部屋に入りこんでしまった？ いや、真はそういうことをする子じゃない。黙ってどこかへ行ってしまうような子じゃない。じゃあ、どこへ？

健はいったん電話にでたがすぐに切れてしまった。とにかく探さなきゃ。でも、館内は広くてどこから探していいか見当もつかない。ほんの一瞬のことだから、遠くへは行ってないはずなのに、なぜどこにもいないのだ。まるで、その辺の空間に裂け目ができ、吸い込まれてしまったかのようだ。

そんなイメージが思い浮かび、ひろをパニックに陥れた。

（助けて——）泣きながら助けを呼んだ。自分で描いた妄想に足をとられているとなんともなくわかっていても、救いにはならない。真はまだたったの五歳なのに！ あたしが目を離したばかりに！ あたしのせい——！

そして思いついた。館内放送で呼んでもらおう！ 迷子の呼び出しなんてちょっと恥ずかしいけど、そんなこと言っていられない。とにかく何かしなくちゃ！ 本人が放送を聞けば出てくるだろうし、小さい子どもだ、誰かが気づいてくれるはずだ！ そうだ、そうしよう！ 保安部へ行こう！

ひとつ解決策を見つけたことでその考えに夢中になって、わき目もふらず、保安部へ走った。それで、誰かに呼び止められたのに気づかなかった。

26・「Kidnap」

27・「Damage」へ続く

あとがき

表紙絵の男の子は真なんですが…

表紙に使う画像をネット検索してて思い出した。そういえば一度描いたんじゃん。過去データを漁ること小一時間。あった。

今の五歳児の真より五、六歳上、イリチャより五、六歳若い、中学生くらいの真。『Kidnap』、誘拐というタイトルからして、余計な効果や装飾は使わずにこのままで行こう。せっかく掘りだしたんだし。

いやー、いろんな人が出てきますね、次から次と。次回ではさらに…

たぶん、ここまでが第四部で、次から五部に入る予定です。

2025年8月20日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十六章 Kidnap

2025年 8月25日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

峯村 明

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社